珍品発見！

岡田米山人
《山水図》

1787年｜紙本墨画
136.5×91.8cm 個人蔵

村上 敬

巨大な山がそびえ、その岩肌は石英のように切り立っています。人が立ち入ることができない深山幽谷のようです。ただ、崖に沿って道が作られ、人々が山頂へ歩いています（部分図）。欄干に寄りかかって休んでいる人がいれば、展望台で景色を眺めている人もいます。厳めしい山と、それを楽しむ小さな人々の対比が印象的です。構図は、点描を駆使して濃く描かれた近景と、細長い山のシルエットが並ぶ遠景によって区分され、空間の広がりを感じさせます。

画題は、中国発祥の「蜀桟道図」だと考えられます。「蜀桟道図」とは、中国の蜀（現在の四川省）と関中（現在の陝西省）をむすぶ桟道を描くものです。蜀は、四方を険しい山に囲まれた辺境の地。そこへ行くには、崖をはうように作られた道を上らなければなりません。このように、蜀は、交通が不便な反面、外敵が侵入しにくい土地でもあり、平和で自然が豊かなことで知られていました。いわば蜀の桟道は、都から離れた別天地へと続く道です。この画題が生まれた背景には、“都のわずらわしい日常から逃れ、自然のなかで遊びたい”という願望（隠逸の思想）がありました。

作者は、岡田米山人（1744−1820）。江戸時代の大坂を代表する画家です。米山人の本職は、津藩の役人でした。津藩の大坂蔵屋敷に住み込みで働く下級役人であり、余技として絵を描きました。大坂蔵屋敷とは、諸領主が年貢米や領内の特産物を売却するため、天下の台所である大坂に設置した出先機関です。そこでの米山人の職務は、年貢米の売買交渉はもとより、米の荷揚げを行う仲仕の監督から、津藩との連絡役まで多岐にわたり、骨の折れる仕事であったと考えられます。蔵役人として暮らすなか、米山人は、中国の文人たちに憧れ、彼らと同じく“都のわずらわしい日常↘

部分図

↘から逃れ、自然のなかで遊びたい”という思いを胸に、絵筆をとりました。

制作年は、1787（天明7）年。米山人の天明年間の作品は、扇面画を含めて2点しか知られておらず、大変珍しいです。天明年間は、米山人にとって、画業の初期であり、大坂蔵屋敷で働いていた時期にあたります。画中には、「米山人」という落款印のほか、2つの印が捺されています。1つは、「尚古」と彫られた印で、米山人の初期の使用印。「尚古」とは、昔の文化に憧れるという意味です。この時期、米山人は、中国の画譜をもとに、明末清初の画法を学びました。もう1つは、「化居」という縦6㎜の極小印で、米山人が蔵役人時代に用いたもの。「化居」の意味は、貯えている貨物を交易すること。蔵屋敷で年貢米の差配を行う者としての属性を表しているのでしょう。「化居」という米粒大の印をさりげなく捺すあたりに、米山人の遊び心が感じられます。

表紙解説

「ルックバック：近代 洋画」展より

原 舞子

明かりが灯り、大勢の人でにぎわう座敷。彼らが囲んでいるのは、明治期の東京や横浜で大流行した牛鍋です。長らく牛肉を食べる習慣のなかった日本でも、西洋からの影響を受け、明治期に入ると肉食が奨励されます。ただ、本格的な西洋料理は高価であったことから、庶民の間では手の届きやすい安価な牛鍋が好まれ、牛鍋の専門店が次々と開店したと伝わります。

長原孝太郎（牛肉屋の二階）1892（明治25）年
三重県立美術館蔵

この作品では、当時流行した牛鍋屋の店内の様子が軽妙なペン画により描き出されています。座敷の奥の壁に掲げられたお品書きには「牛なべ」の他にも「カツレツ」、「オムレツ」などの文字も見えます。牛鍋の中身や、その他の料理が具体的に描かれているわけではないのに、味覚や嗅覚が刺激され、空腹感を誘います。

しかし、庶民の生活を活写した長原も、これ以降は日常生活を描く風俗画からは離れ、油彩による風景画や物語を下敷きとした大型の絵画制作へと移行します。それが近代日本の洋画界が志向した芸術の在り方だったのでした。

利用のご案内

開館時間｜
午前9時30分−午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日｜
月曜日
（祝休日にあたる場合は開館、
翌平日［2025年5月7日（水）、7月22日（火）、
8月12日（火）、9月16日（火）］閉館）

観覧料｜
◯ 常設展示
［美術館のコレクション＋柳原義達の芸術］
一般 310（240）円
学生［大学・各種専門学校等］210（160）円
高校生以下無料　※（　）内は20名以上の団体料金
◯ 企画展示／その都度定めます。

※学校の教育活動として県内の幼・小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、引率者も含めて無料となります。
※障害者手帳等（アプリ含む）をお持ちの方が観覧する場合、付き添いの方1名を含めて無料となります。
※家庭の日（毎月第3日曜日）の観覧料は、各展覧会（企画展／常設展）の団体割引料金となります。

メールマガジン｜
三重県立美術館の情報を、みなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。購読料無料。
詳しくは、美術館ウェブサイトをご覧ください。

美術館公式X（旧Twitter）｜
三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。Follow us on X @mie_kenbi

三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇親会等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

年会費｜
一般会員：3,000円　ペア会員：5,000円
グループ会員（4名）：8,000円
◎ 特典
会員鑑賞券配付、観覧料半額割引、ミュージアムショップご利用割引等。詳細は三重県立美術館友の会事務局（TEL059-227-2232／美術館FAX）までお問い合わせください。

公益財団法人 三重県立美術館協力会賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

会費｜年間一口
法人：50,000円　個人：25,000円
準会員：10,000円
◎ 特典
展覧会ならびに内覧会への招待、各展覧会のカタログ謹呈等。詳細は三重県立美術館協力会事務局（TEL 059-227-2232／美術館FAX）までお問い合わせください。

三重県立美術館
MIE PREFECTURAL ART MUSEUM

〒514-0007 三重県津市大谷町11
TEL.059-227-2100（代表）
FAX.059-223-0570
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/

交通｜
津駅（近鉄・JR）西口より徒歩約10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西団地循環」、「津西ハイタウン行き（むつみ・つつじ経由）」、「夢が丘団地行き（総合文化センター前経由）」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分
※できる限り公共交通機関をご利用ください

三重県立美術館ニュース
「HILL WIND 56」

発行日｜2025年5月19日（年・無料配布）
企画・編集・発行｜三重県立美術館　デザイン｜高田尚子　印刷｜サンメッセ株式会社

三重県立美術館ニュース

HILL WIND 56

MIE PREFECTURAL ART MUSEUM NEWS

「集団DAC」と四日市

髙曽由子

図2｜
山本安志作の素焼きコイン
集団DAC陶展
（会場：名古屋ホルベイン画廊）より
「食器」55号、1972年より転載

当館では、2023年に伊賀市出身の陶磁器デザインの先駆者・日根野作三（1907-1984）の回顧展を行いました。愛知、岐阜、三重、滋賀などの窯業地を巡り、デザイン制作と教育に熱意を持って取り組んだ日根野作三。日根野が各地を訪れるたび、多くの若者たちが集って教えを請うたといいます。人々が集い、議論することを重んじていた日根野に触発されてか、次第に各地では教え子たちがグループを結成し、活発な活動を展開しました。日根野の来訪は、デザインの知識だけではなく、デザインについて語る場をも各地にもたらしています。

三重県では、1970年頃に四日市で結成された「集団DAC（ダック）」が、これにあたります。四日市では戦前から輸出用陶磁器の生産がさかんでしたが、戦後には空襲からの復興を経て、愛知や岐阜に次ぐ陶磁器工業地として知られていました。

日根野は1968年頃から三重県窯業試験場で指導を行うほか、瀬栄合資会社四日市工場でデザインの提供を行っており、たびたび四日市を訪れました。三位陶苑の稲垣太津（たつお）男のもとを訪ねることも通例で、ここでは夜な夜な多くの人が日根野を囲み、教えを受けたといいます。

集団DACは、ここに集った者を中心に、四日市で陶磁器業に携わる若者で組織されました。会長は瀬栄合資会社四日市工場のデザイナーであった森正が、事務局は三重県窯業試験場の三宅清路が務め、稲垣太津男や井田敏、山本安志らが参加しています。会員は固定されておらず、結成当時には14人ほどが参加しました[1]。

「DAC」の名がデザイナー、アーティスト、クラフトマンの頭文字に由来するように、会には実用の器を制作する者からオブジェに力を入れる者まで、多彩な若者が集いました。結成当時のリーフレット[2]には同会が四日市の「地縁的集団」であることが述べられていますが、一方で、「われわれは社会に対する表現手段として、または自己創造の方法として“やきもの”を選んだ陶芸家、クラフトマン、デザイナーの集団である」とも表明しています。この会は親しく顔を合わせる人々の集団であると同時に、焼き物を通して社会に携わり、自己表現を行うという共通のビジョンを持ちました。

図1｜
ジャスコ四日市店での
展示風景
「食器」53号、
1971年より転載

彼らは仕事を終えた後、月2回ほど学習会を、また定期的に発表会を開くことを活動としました。1971年6月にはジャスコ四日市店5階の催場で展覧会を開き、19名の会員が陶磁器約300点を展示しています[3]。工業都市として発展してきた四日市は、戦後まもなくより公害問題に苦しんでいましたが、同展ではこの問題に応答し、「公害のまちを人間のまちに」をテーマとしました。発表されたのは花器、土鍋などの実用品、オブジェであり、ここでは焼き物を通して工業化された都市に人間的生活を取り戻すことが掲げられました。翌年7月には、当時の市長九鬼喜久男の理解も得て、四日市市役所前にて野外陶芸展を開催。前回展と同じテーマのもと、通称「70メートル道路」の中央にオブジェを並べました。

盛り上がりを見せた集団DACの活動は、2–3年で終わりを迎えました。短い活動期間となった一因には、多くが20代半ばであった会員がそれぞれに本格的な表現活動に移行し、忙しくなったことも関係したといいます[4]。

集団DACの活動時期は、四日市において陶磁器が一大産業であり、また工業化の弊害に目が向けられた時代でした。このような時代に多くの若者が集ったのは、焼き物と自ら、焼き物と社会がどのような関係性を結ぶべきか、再考する必要性を感じていたからでしょう。集団DACの成立は、四日市陶磁器業における、一つの転換点であったように思われます。

謝辞｜
調査に際しては、森正氏、三宅清路氏、稲垣竜一氏、
日本陶磁器意匠センターにご協力を賜りました。
深く感謝申し上げます。

註1｜「集団DAC（ダック）発会！」「食器」43号、1969年。
註2｜集団DACリーフレット（断片）より。
註3｜「意欲作品ずらり300点 四日市で“万古焼に新風を”と陶展」中日新聞、1971年6月16日朝刊。三宅清路によれば、第1回展がジャスコで行われたのは、「文化的なことを行うなら」と同社取締役の小鳩千鶴子が協力をしたためであったという。
註4｜森正氏インタビュー、2022年6月9日。

「学校美術館」今昔

鈴村麻里子

「学校美術館」とは、2003年度から当館が不定期に実施している、学校で館蔵品を一日限定で展示する取組です。学校での展覧会とも言うべき「学校美術館」は、2008年度までは年に1、2回程度開催されてきましたが、同年度の小学校での開催を最後に、長らく実施できない状態が続いていました。再開の契機となったのは、特別支援学校との連携事業です。2016年度の工事休館期間に、文化庁助成事業の一環で、県内の特別支援学校2校で当館所蔵品の展示が行われました。2008年度までのいわば第一次「学校美術館」の担当者からノウハウを学びながら、筆者を含む職員数名が事業を担当しています。そして、再度休館期間を設けた2022年度には、県内の高等学校にて、生徒が執筆した作品紹介文を作品と一緒に掲出し、近隣の小学校の児童を会場に招く「学校美術館」を実施しました（図1）。

展覧会形式で大規模な「学校美術館」を行う場合、搬出から搬入までをわずか一日で済ませるため、展示作業も撤収作業もスピード勝負になる感は否めません。学校が短時間で美術館に変貌する非日常的な華やかさはありますが、当日の作業を安全に進めるためには、入念な準備と大勢の人の協力が必要になります。当然、事業にかかる経費についても、一定額の外部資金を計画的に獲得しなければなりません。

図1　撮影：松原豊

図2

図3　撮影：松原豊

約4か月の工事休館を予定していた今年度は、より気軽に取り組める新しいプログラムを開発することにしました。「学校美術館」とは別に定番化している、当館の学校向けプログラムの一つに「出張授業」があります。そこで、「出張授業」と「学校美術館」の要素を組み合わせて、少数の所蔵品の輸送を伴う授業を学校で実施することにしました。つまり、いわゆる展覧会ではなく、あくまで鑑賞の授業の中で、複製ではなく本物の作品数点を見てもらおうという試みです。

この新しい授業趣旨に賛同してくれた二つの学校で、12月に館蔵品を持ち込む授業を実施しました（12月11日：三重県立かがやき特別支援学校緑ヶ丘校／12月16日：三重県立飯野高等学校／それぞれ図2、3）。作品は教員と学芸員が選定。限られた点数ではあったものの、かえって集中して作品に向き合うことができたという声も聞かれました。一方で、初回の実施ゆえに、今後の課題も見つけることができました。通常、美術館の展示室で作品一点を何人かで同時に鑑賞する場合は、作品の大きさが選定の重要な決め手の一つになります。学校に作品を輸送する場合、仮設パネルのサイズや耐荷重、搬入時の開口部のサイズ等を考慮すると、美術館の所蔵品の中では小さい作品を選ばざるを得ません。そのため、今回の授業では、参加者全員が同時に一つの作品を鑑賞することには難しさを感じました。複製を併用したり、複数点の作品の比較を促したり、グループ分けをしたりする等の方法で課題解決を試みましたが、一部の参加者には「見えにくい」というストレスを与えてしまったかもしれません。新しい定番を作るためには、まだ試行錯誤を繰り返す必要がありますが、物理的制約を考慮した上で、最適な方法を模索していきたいと思います。

＊本稿前半部は、以下の拙稿の一部を修正したものです。
鈴村麻里子「学校美術館に―三重県立美術館における『学校美術館』の取組」「美術による学び研究会メールマガジン」465号、2023年3月19日
＊2022年度、2024年度の事業も、文化庁助成事業（Innovate MUSEUM事業）の一環。